

新潮文庫

緋 文 字

ホーソン
鈴木重吉訳



新潮社

字 文 緋

定価 110 円

新 潮 文 庫

昭和三十三年十月十五日 発行
昭和四十二年二月十五日 十刷

訳 者 鈴 木 重 吉

発 行 者 東京都新宿区矢来町七一
佐 藤 亮 一

発 行 所 東京都新宿区矢来町七一
株式会社 新 潮 社

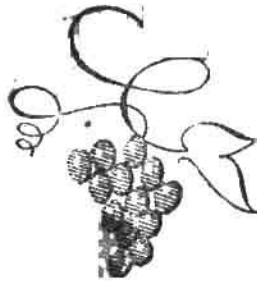
電話東京二六〇局一一一（大代）
振替東京八〇八番

乱丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。

新 潮 文 庫

緋 文 字

ホ ー ソ ン
鈴 木 重 吉 訳



新 潮 社 版

1101

目次

獄舎の入口	七
広場	九
認め知る	二
対面	三
針仕事をするヘスタ	四
パール	五
知事の広間	六
子供の小妖精と牧師	七
医者	八
医者とその患者	一〇〇
胸のうち	一二三

牧師の寝ずの行	一三二
ヘスタの別な考え	一三六
ヘスタと医者	一四六
ヘスタとパール	一五五
森の散歩	一六四
牧師とその教会員	一七二
満ちあふれる日光	一八六
小川のほとりに立つ子供	一九四
迷っている牧師	二〇四
ニュー・イングランドの祝日	二一八
行列	二三〇
緋文字を明示する	二四四
結び	二五五
あとがき	二六三

緋
文
字

獄舎の入口

ひげ面の男の群が、どれもくすんだ色の服を着て灰色のとがった高帽子をかぶり、それにずきんをかぶった女も無帽の女もまじり、木造の大きな建物の前に集っていた。建物の扉は桎材のどっしりした造りで、鉄の尖った大釘が一面に打ちつけてあった。

新しい植民地をつくる人たちは、どのような道徳的で幸福な理想郷をもとくもくろんでいるにしても、初期の実際に必要なものの中に、処女地の一部をそれ／＼墓場と監獄の敷地とに割当ててることをいつも認めているのだ。この習慣にしたがって、ポストを開いた人たちがコーンヒルのどこか近くに最初の監獄を建てたと思っても差支えなからう。最初の墓地をアイザック・ジョンソンの地所で彼の墓のまわりに作ることにしたのとほとんど同様に適切なことであつた。もっとも、この墓地はその後キングス・チャペルの古い境内で共同墓地の中心になつてしまったのだが。たしかに、その町ができて十五年か二十年後の今は、この木造の牢獄も既に雨風でよごれそのほか年月のたった跡をとどめて、むっつりと陰気な感じの前部を一段と暗く見せていた。桎の扉のどっしりした鉄の部分につく錆は、この新世界ではほかの何よりも古めかしく見えた。犯罪に関するものはなんでもそうだが、この牢獄も青春の時期など知らぬように見えた。このみに

くい大きな建物の前には、街路の車道との間に草地があつて、ごぼう・あかぎ・アップルペルーなどの見苦しい草が一面に生い茂っており、監獄という文明社会の黒い花をこんな昔に咲かせたこの土地にじっくり合うものをこれらの雑草は見つけていたにちがひなかった。だが、入口の片側には、ほとんどしきいのところに根をはって、野ばらの木が一つ、この六月という月に、宝石のように優雅な花につつまれていた。こゝへはいつてゆく囚人や宣告がすんで刑をうけに出てくる罪人を大自然の深い心があわれみそして親切をしめしているしるしに、その芳香とはかない美をささげているものと想像されるのだった。

このばらの木は、ふしぎな縁で歴史のなかに生きている。だが昔その上に影を投げていた松や檜の巨木が倒れて長い後にも、酷しい昔の荒野から生き残っていただけなのか、それとも、信じにたるかなりの根拠があるのだが、聖女となったアン・ハッチンスンがこの監獄の入口にはいなかったとき、その足にふまれた土から萌え出たのか、——それはあえて決めないことにしよう。今この物語が始まろうとしているその不吉な入口のすぐそばにこの花を見つけたので、一輪つみとって読者にさゝげるよりほかはなからう。この一輪の花が、物語の途中に姿を見せるやさしい心の花を象徴し、また人間のもろさや悲しみをのべる暗い結末を和げる役に立てばよいと願うことにしよう。

広 場

場

広

9

二世紀も前のある夏の朝、監獄通りの牢獄前の草地に、ポストンの住民がかなりたくさん集っていて、鉄の締め金のついている櫓の扉をじっとみつめていた。どこかよその住民が、ニューヨーク・イングランドの歴史にしても後の時代なら、この良民たちの石のようにきびしく固いひげ面を見て、何か恐ろしいことが起る前兆と思ったことだろう。誰か著名な罪人の、予期した処刑にほかならぬことを示していたとも言えようし、そんな場合には法廷の判決も一般の感情が下す判断を確証するにすぎなかったのだ。だが、あゝした初期の清教徒の厳しい性格を思うと、こういう推測もはっきりとするわけにはいかないのだ。物ぐさな奴隷か、親が役人に引渡した不孝な子供が、笞打場でこらしめをうけるところであつたかもしれない。また、信仰至上主義者やクエーカー教徒や異教の信者が笞打って町を追われるとか、怠け者で浮浪のインディアンが白人の火酒に酔い町を騒ぎまわり、笞で打たれながら暗い森へ追い払われるのかもしれない。あるいは知事の未亡人で激しい気性のミストレス・ヒピンズのような魔女が絞首刑になるのだったかもしれない。いずれにしても、当時の人々にふさわしく見物人のしかつめらしい態度に変わりはなかった。彼らの間では宗教と法律がほとんど同じであり、その性格の中にこの二つがすっかりにじみこん

でいて、大衆の懲罰は軽いのも厳しいのも一様に敬い恐るべきものとなっていたのだ。罪を犯した者がこういう傍観者から求める同情は、処刑台の上では実に乏しく冷いものだった。また一方、今ならある程度ばかりしい恥さらしや笑い草になるような刑罰も、死刑に劣らぬほどきびしい威厳をそなえていたのかもしれない。

この物語の始る夏の朝、注目すべきことは、群集にまじっていた数人の婦人が、どんな刑罰が行われるにしてもそれに特別な関心をもっているように見えたことだ。大して洗練された時代ではなかったもので、下スカートや^フア^イッ^グの下スカートを^ルはいて公衆の中へはいりこんで行ったり、場合によっては処刑の行われている処刑台のすぐ前の群の中へ軽そうでもない体で割込むのを不作法だと思ってひかえたりはしなかった。精神的にも物質的にも、古いイギリスで生れ育った主婦や娘たちは、六・七代はなれた子孫にあたる今の女性に比べると粗野な性格をもっていた。というのは、代々のどの母親も自分より性格は弱くもろくもないにしても、自分の子供には逞しい健康色をへらし、いっそうきしゃでつかのまの美しさや、ほっそりした体つきを伝えてきたからだ。今この監獄の扉のあたりに立っていたのは、雄々しいエリザベス女王が女性の代表者として必ずしも不適當でなかった時代から半世紀とはたゞないころの婦人たちだったのだ。エリザベス女王と同国人であり、本国の牛肉やビールが、同様に洗練のたりない精神上の食物といっしょに体や心の組織の中へはいりこんでいたのだ。それで、明るい朝の太陽が、広い肩やよく発達した胸に輝き、遠く離れた島国で熟しニュー・イングランドの雰囲気で青ざめもやせもしないな

い赤らんだ円い頬に照っていた。その上、たいていは主婦らしいこの人たちの話しぶりは大胆で朗々としていて、音量にしても意味にしても、今日ならはっとするようなところがあった。

「みなさん」、いかつい顔の五十女が言った、「私こう思ってるんだけど。私たちは女だけと一人前の年をして教会でも評判のいい信者なんだから、私たちの手でこのヘスタ・プリンみたいな悪い女を処分するしたら、ずいぶん世間のためになるだろうって。どう思うの？ あんたがた。こうして集ってる私たち五人の前で、あのあばずれが裁判をうけたら判事さん方のきめたような判決ですむだろうか？ とてもそうは思わないね！」

「噂じゃ」と別な女が言った、「あの女の牧師のディムズデイル先生はご自分の教区でこんな恥かしいことが起ったりしたんでとても悲しんでおられるんだってさ。」

「判事さんたちは信心深いけれど、慈悲がありすぎるのさ——ほんとうに」三番目の中年女がつけ加えた。「少くとも、ヘスタ・プリンの額に真赤な鉄の焼印を押したらよかったんだよ。きつとちぢみ上ったろうにね。でも高慢ちきなあばずれのことだから、上衣の胸に何をつけられたって何ともないだろうさ！ ほら、ね、ブローチだとか何とか異教徒じみた飾りで隠して、前と同じように平気で街を歩くだろうよ！」

「まあ、でも」と子供の手をひいている若い主婦がもっと優しい声で口をはさんだ。「しるしは隠せても、胸の苦しみはいつまでも残りましようよ。」

「しるしや焼印が、上衣の胸にところが額の肉に押そうが何だって」と、も一人の女が叫んだ。

この裁判官気取りの女のうち一番醜い顔で薄情な女だった。「この女は私らみんなを辱しめたんだから、死ぬのは当り前だよ。そんな法律がないって言うのかい？　ちゃんとあるんだよ。聖書にだって法令の本にだってさ。だから法律を役に立てなかった判事たちは、自分の女房や娘が墮落したって自業自得さ。」

「驚いたなあ、おかみさん、」群の中から一人の男が声を張りあげた、「絞首台が恐ろしいという健全な気持のほかは、女には美德がないのかね？　でもひどい言葉だ！　しっ、ほら、みなさん！　監獄の扉の錠前が廻ってる、だからプリンさんが出てきますよ。」

牢獄の扉が中からぱっと開いて、先ず日光の中へ暗い影がさすように、教区吏が腰には刀、手には官杖（職能や権威を標示する棒）をもち物凄くない不気味な姿で現れた。この人物の顔付には清教徒の法典のもつ陰気な酷しさが残らず表われ出っていて、罪人にこの法典を決定的に一番厳しく適用し執行するのが彼の役目だった。官杖を左手で差し出し、右手を若い女の肩において連れだして来たのだった。だが獄舎の入口まで来ると、自然に備わっている威厳と強い氣力を示すような動作で、男の手を振り切って、その女は自分から進んでするようにして外気の中へ進み出た。腕には生れて三月くらいの赤児を抱いていたが、赤児は強すぎる日光に目をしばたいて小さな顔をそむけた。これまでの生活では監獄の独房や他の陰うつな部屋のうす暗い光しか知らなかったからだ。

その若い女——この子供の母親——が群集の前にすっかり姿を見せたとき、まず思わず幼児をしっかりと胸に抱きしめるほかはなかったようだ。それは母親にふさわしい衝動というよりは、自

分のドレスに縫いつけるかとめつけるかしたあるしるしをそうして隠すためらしかった。だがすぐ、恥のしるしを一つ隠しても一つのしるしをうまく隠せはしないと賢くも見てとり、彼女は赤児を片腕に抱き、顔を真赤にしながら尊大に微笑し、ものおじしない視線で、町の人々や近所の人たちを見廻した。ガウン(婦人服 長上衣)の胸には上等の赤い布に、金糸で手のこんだ刺繍と風変わりな飾りをまわりにつけ、その上にAの文字が現れていた。とても芸術的にできており、又豊かな目のさめるように華麗な幻想にあふれていたので、身につけている衣服に一番よく似合う装飾品として全く効果的だった。それに衣服もその時代の趣味に合ったあでやかなもので、この植民地の贅沢取締令の許す限度をはるかに越えていた。

若い女は長身で、大柄なこの上なく優雅な容姿だった。黒いふさふさした髪にはつやがあって日光を反射し、顔は整って美しい容色であるばかりでなく、目立っている額と真黒な眼に特有な強い印象を与えるものをもっていた。また当時の上流社会風にならって淑女らしくもあった。しかし豪華な感じや威厳をそなえていて、現代淑女の特徴となっている繊細なそして消え入りそうな言うに言われぬしとやかさとは違っていた。そしてヘスタ・プリンが監獄から出てきたときほど、古風な意味で淑女らしく見えなかった。前からの知り合いで、不幸な暗い影に曇り暗くされている姿を見るものと思ひこんでいた人たちは、彼女が美しく光り輝き、彼女を包んでいた不幸や不名誉が光輪をなしているのを目のあたり見て仰天したり、ぎょっとしたりした。感じの鋭い人の眼には、その中にとっても痛ましいものがあつたというのも正しかろう。事実、その

衣服は、獄の中で、この時のために自分の幻想に型どって作ったもので、彼女の心の姿勢や絶望し向う見ずな気持を、奔放ではなやかな特徴によって表現しているように思えた。しかし一樣に人の眼をひき、それを身につけている女を云わば一変させたものは——それでヘスタ・プリンと親しく知合っていた男も女も今初めてこの女を見るような印象をうけたのだが——異様な刺繡をしてその胸に飾りつけたあの緋文字であった。それには魔力があつて、彼女を普通の人間関係から取除き、彼女だけの世界に閉じこめたのだった。

字 「針仕事はうまいのね、きつと、」 見ている女で言った者がある、「でもこの厚かましいあばずれの前に、こんな工夫をして見せびらかしをやった者があつたらうか！ だって、皆さん、信心深い判事さんたちの前で笑つたり、あの立派な方々が罰のつもりでしたことを自慢したりするなんて一体何てことなんだろうね？」

緋 年寄の中で一番いかめしい顔の女がうけついで、「マダム・ヘスタの立派な上着をあのきしゃやな肩からはぎ取つたらいゝんだ。あの赤い文字はずいぶん奇妙に縫い取つてあるが、私のリュ―マチに使うフランネルの布切れをやれば、もっと似合うだろうよ！」

「まあ、お静かに、皆さん、お静かに！」 一番若い女が声を落して言った。「あの人に聞かせないで！ あの刺繡の文字の一針だって、あの人の胸にこたえないのはないんですよ。」

このとき恐ろしい顔の教区吏が杖を振って見せた。

「どいた、どいた、皆の衆、御用だぞ！」 彼は叫んだ。「道をあける、保証していゝが、プリン

さんは、今から午後の一時まで、男にも女にも子供にも、この立派な衣裳がすっかり見える場所へ置かれるんだ。公正なマサチュウセツ州のありがたさですぞ、罪は日向へ引ずりだされるんだ！ さあ来なさい、マダム・ヘスタ、広場でその緋文字を見せるんだ！」

すぐさま見物人の群の間に狭い通路ができた。教区吏が先に立ち、恐ろしい顔の男たちや優しさのない顔をした女たちが列を乱して従う中にはさまって、ヘスタ・プリンは罰をうける定めの場合へと歩きだした。学童の群が、今始っているこの事件のために学校が半どんになったというほかは何もわからず、たゞ何か知りたい一心で、彼女の歩いて行く前を駈けながら、しきりに振り向いては彼女の顔をのぞきこんだり、その腕に抱かれて目ばたきしている赤児や胸の不名誉な文字をじろじろ見たりした。そのころ、獄舎の入口から広場までは大した距離ではなかった。でも、囚人の体験で測れば、かなり長い道程であつたろう。というのは、傲慢な態度ではあつたが、物見高く群れ集る人たちの足音を聞く度毎に、心臓を街頭へ投出されて群集に踏んだり蹴ったりされるように、はげしく悶えたことだろう。しかし、私たちの本性には、奇異な慈悲深いきまりがあつて、苦みをうける者は現在の苦悩によって自分が今堪えているものの程度を知るのではなく、主にその後胸に喰いこむうずきで知るのである。それで、平静といつていゝほどの態度で、ヘスタ・プリンはこの苦しい試煉を通りぬけて、広場の西端にある処刑台のようなところへ来た。それはポストン最古の教会のすぐ軒下にあつて、そこに固定した設備かと見えた。

事実、この台は処刑道具の一部であつたもので、今では二三代前から単に歴史的な物としてまた